



Data 2023-73

監督・脚本: ニノ宮隆太郎

出演: 光石研/吉本実憂/工藤遥/
杏花/岡本麗/光石禎弘/
坂井真紀/松重豊

👁️👁️ みどころ

中国では“第8世代”と呼ばれる若き才能が次々と登場しているが、邦画はくだらない商業映画ばかり！そう思っていたが、本作でニノ宮隆太郎という若き才能を発見！

俳優には役所広司のような“主役専門”もいれば、光石研のような“脇役専門”もいる。そんな光石に“あて書き”をし、全編出ずっぱり、全編しゃべりっぱなし、全編会話劇を徹底させた本作における“主役”光石研の存在感は圧倒的だ。しかし、人生のターニングポイントを迎えた男が新たな一歩を踏み出すまでの日々を描いた希望の物語とは？

会話劇は殺陣と同じく“受け手”が大切。坂井真紀、松重豊の安定感はずすがだが、冒頭、中盤、そしてラストでキラリと光る存在感を見せる若手女優、吉本実憂にも注目！何も、悩みは中年男だけの専売特許ではない！なお、本作は韓国のホン・サンス監督の会話劇と対比してみるのも一興だ。

一匹狼型弁護士(?)の私は、商業主義に毒されず、とことん独自路線をひた走るニノ宮隆太郎のような才能が大好き！本作に拍手を送ると共に、今後の展開にも期待したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この若手監督に注目！日本にも、若き才能を発見！■□■

梅野隆太郎なら岡田彰布監督の下で現在、快進撃を続けている阪神タイガースのキャッチャーとしてよく知っているが、ニノ宮隆太郎って一体誰？それは本作の脚本を書き、監督した男だ。1986年生まれの彼は、俳優として出演した映画も多い上、2012年には初の長編作『魅力の人間』で第34回びあフィルムフェスティバルで準グランプリを受賞するなど、映画歴は長い。そんな彼が2019年のフィルムメックス新人監督賞に応募し

たところ、多くの才気あふれる脚本の中からグランプリに選ばれ、本作の企画が持ち上がり、彼の商業映画デビュー作たる本作が完成したそうだ。

本作のパンフレットには、瀬々敬久監督の「二ノ宮隆太郎の映画の芯には、純粹さの塊の結晶とも思えるものがある。」と題する「ESSAY」があり、そこでは2012年のふかやインディーズフェスティバルで審査員をやった時以来注目していた二宮の才能について詳しく書かれている。さらに、イントロダクションでは「フェルメックス新人監督賞に輝く気鋭の才能が、生きることの真実に迫る」と紹介されている上、賀来タクト氏（文筆家）の「『枝葉のひとつ』から花が芽吹くとき」と題する「REVIEW」でも、「そろそろ世間は二ノ宮隆太郎という才能に自覚的になった方がいい。」「それでなくとも、この魅力あふれる商業映画処女作からはそう簡単には逃げきれまい。」と絶賛されている。

中国では、第8世代監督として『凱里ブルース』（15年）（『シネマ46』190頁）のビー・ガンや『象は静かに座っている』（18年）（『シネマ46』201頁）のフーボー、さらに『春江水暖〜しゅんこうすいだん』（19年）（『シネマ48』199頁）のグー・シャオガン、更には『小さき麦の花』（22年）（『シネマ52』237頁）のリー・ルイジュン、『郊外の鳥たち』（18年）（『シネマ52』243頁）のチウ・ション等々、若手の才能が次々と登場しているが、日本にも二ノ宮隆太郎のような若き才能を発見！

■光石研が12年ぶりの単独主演！テーマは？舞台は？■

2023年の第76回カンヌ国際映画祭で役所広司がヴィム・ヴェンダース監督の映画、『PERFECT DAYS』（23年）で主演男優賞を受賞する快挙を成し遂げた。日本人の受賞は、2004年の柳楽優弥以来2人目だが、役所は出演する映画のほとんどで主役を務める俳優だ。それに対して、光石研は、唯一主演した映画は『あぜ道のダンディ』（11年）だけで、（失礼ながら）脇役が専門！そんな彼は、近時、『波紋』（23年）でも、家出から戻ってくる亭主を演じていい味を出していたが、本作は12年ぶりに単独主演した映画だ。

本作は、光石と同じ事務所に所属していた二ノ宮隆太郎が子供の頃から光石のファンだったこともあり、彼の背中を追う形で構想されたもの。そのため、定時制高校の教頭・末永周平を演じる光石に、“あて書き”した脚本になっている上、110分の全編にわたって光石が登場してくるので、光石の演技に注目！

本作の舞台は、北九州市の黒崎。テーマは、チラシによれば、「人生のターニングポイントを迎えた男が新たな一歩を踏み出すまでの日々を描いた希望の物語」だ。

■これは単なる健忘症？それとも？博多弁は面白い！■

土佐弁といえば坂本龍馬。そして、博多弁といえば龍馬をこよなく愛する歌手、俳優である武田鉄矢だ。彼のヒット曲『母に捧げるバラード』（73年）では、母親がシバ息子（＝武田鉄矢）を叱りつけるセリフが印象的だったが、本作では第1に、冒頭の介護施設で暮らす父親に「いやー参ったよ。どうしようかね、これから」と博多弁で語りかけるシーケンス、第2に自宅で一人娘の由真（工藤遙）に、突然「恋人はいないのか？」等と問い

かけるシークエンス、第3に、元教え子の平賀南（吉本実憂）が働く定食屋で昼食を済ませた後、会計をせずに出てしまった周平が「俺、病気なんよ。忘れるんよ」と、一旦出した千円札を仕舞って立ち去ってしまうシークエンスが印象的だ。そのほとんどが光石の一人ゼリフ、そして一人芝居だが、セリフの面白さと脚本の良さ、そして演出の巧みさのため、観客の目をぐっと引きつけるものになっている。

この3つのシークエンスをみただけで、第1に周平は単なる健忘症ではなく、進行中の認知症に違いないこと、第2に家庭内では既に彼の居場所がなくなっていること、第3に校長になれないまま定年を1年後に控えた今、これからどう生きていけばいいのかが全く分からなくなっていること、がよくわかる。織田信長の時代は“人間50年”だったが、“人生100年”と言われている昨今、60歳で迎える定年は周平の人生のターニングポイントなのだ。そこで、“新たな一歩”を踏み出すためには、これまでの人生（人間関係）を見つめ直すことが不可欠だが・・・。

■□■ “殺陣”と同じく “会話劇” では “受け手” が重要！ ■□■

時代劇の殺陣は主役1人がカッコよく何人もの敵をバツバツと切り倒していく醍醐味が観客をスカッとさせてくれる。しかし、俳優・高橋英樹の解説を聞くまでもなく、それを成立させるのは、主役の演技力以上に、斬られ役＝受け手を演じる脇役の演技力だ。それと同じように、吉永小百合の朗読劇やモノローグによる一人芝居はともかく、スクリーン上で観客の目と耳を集中させる素晴らしい“会話劇”を成立させるためには、主役の演技力はもとより、それ以上に受け手の演技力が重要になる。韓国のホン・サンス監督作品はそのほとんどが会話劇で構成されているが、そこで主役を演じるホン・サンス監督のミュージズ、キム・ミニの語りの相手方になる受け手は素晴らしい俳優ばかりだ。

それを考えれば、本作で周平の妻・彰子役を演じる坂井真紀、周平の同級生でバイク屋を営む石田啓司役を演じる松重豊の演技達者ぶりは明らかだから、その“会話劇”はいくら長く続いても安定感があるのは当然。とりわけ、TVの『孤独のグルメ』シリーズで独特の味を出し、『どうする家康』でもパイプレイヤーとしていい味を見せている松重豊は、本作でも慣れない博多弁を駆使しながらいい味を出しているのも、それに注目！

他方、突然変異（？）したかのような父親からの、気持ちの悪い言葉の連発を受け止める一人娘・由真役を演じる工藤遙の受け手としてのレベルは？そして、本作冒頭はもとより、ストーリーの中盤でも数回顔を出す上、ラストで大きな存在感を見せつける、元教え子の平田南役、吉本実憂の受け手としてのレベルは？

■□■ 悩みは私だって！ラストの “対決型” 会話劇に注目！ ■□■

本作は全編を通じて二ノ宮監督の“あて書き”脚本による、周平を主役としたセリフ芝居。『キネマ旬報』7月上・下旬合併号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、2人の評論家が星4つとし、星5つをつけた服部香穂里氏は、「全篇出ずっぱりの光石研の、いかなる役柄にも変わらず緻密に取り組んできた俳優業の矜持のようなものも光る、集大成

的味わいも感慨深い逸品」と絶賛している。しかし、本作で見逃してはならないのは、ラストの会話劇は周平の一人ゼリフ、一人芝居ではなく、ベテラン・光石研に若手女優・吉本美憂が敢然と挑む“対決型”の素晴らしい会話劇だ。

同級生の石田と懐かしい小料理屋で、久しぶりにおいしい料理を食べ、久しぶりに楽しい会話を満喫した周平だったが、帰り道で石田から「なんかおかしいの。問題あるんやったら言え」と心の中を見透かされてしまうと……。さらに、帰宅した周平が、彰子と由真に「学校を辞める」と（心にもないことを？）告げ、2人の関心を買おうとした上、さらに「2人に好かれたいんよ。ただそれだけ」と腹の底の気持ちを吐き出したが、それって逆効果？そんな周平を気持ち悪く思った（？）彰子からは、「あんたってこんな人やったけ」ときついお言葉が返ってくることに。

それに続いて、再び父親の介護施設を訪れた周平が、冒頭のシーンと同じように一方的に話しかけて出ていくから、ひょっとして本作はこれで終わり？そう思っていると、最後のハイライトとして登場するのが、千円の“未払い金”を発生させた“お詫び”として、周平が商店街のパン屋、公園、小学校など自分の思い出の場所を南に案内した後に、喫茶店内で登場する2人の対決型会話劇だ。そこで南は「定食屋を辞める。金を稼ぐため、北九州の某所で某仕事に就く」ことを語り、心の中にずっと秘めていた悩みを打ち明けることに。本作は、それまでずっと人生のターニングポイントを迎えた周平の悩みばかり描いてきたが、悩み事は定年間近の周平だけでなく、20歳前後の女の子、南にだってあるわけだ。さあ、それに対する周平の対応は？

■□■脚本への私の2つの疑問は？どなたか回答をよろしく！■□■

若く才能のある二ノ宮隆太郎の脚本にケチをつけるつもりは毛頭ないが、本作の脚本について、私には少し納得できない点が2つある。その1つは冒頭、店から追いかけてきた南に対して「俺、病気なんよ。忘れるんよ」と言いながら、いったん出した千円札を仕舞ってしまうこと。それは一体なぜ？「俺、病気なんよ。忘れるんよ」に続いて、「ごめん、ごめん」と言いながら千円札を渡せばいいだけなのに、なぜ周平はそれを引っ込めて去っていったの？このように、1回分の昼食代が“未払い”になったため、昨日の代金を南が立て替えてくれたことを知った周平は、「今度お礼をする」と謝らざるを得ないハメになり、そのお詫びが、訳のわからない（面白い？）2人のデート劇（？）として展開していくことになる。したがって、千円札の引っ込めシーンは大きなポイントになるのだが、なぜそうなったの？そこは私にはイマイチわからず、納得できない。

もう1つは、冒頭のシークエンスだけでは、単なる健忘症？それとも進行中の認知症？それをはっきりさせないまま、ある日、周平が1人で医師の元を訪れるシークエンスになること。いくら夫婦仲が冷え切り、また父娘間のまともな会話もゼロという状況であっても、スクリーン上を見ている限り、家族3人の日常生活は滞りなく営まれているから、健忘症？それとも認知症？そんな病状に悩んでいる周平が1人だけで病院に行き、1人だけ

で医師から病状の告知を受けることは、あり得ないのでは？つまり私の疑問は、なぜこの病状の告知の場に妻の彰子がないの、かということだ。

この両者とも、前述した“本作のテーマ”に直接関わることではないが、それがハッキリわからないため、私の目にはストーリー展開が少し不自然に見えてしまうことに。もし、どなたか回答していただける方がいれば、是非よろしく。

2023（令和5）年6月20日記